



米沢市でスピーチするキャロライン・ケネディ駐日米国大使



上杉鷹山の像とキャロライン・ケネディ駐日米国大使の来訪記念碑（米沢市松が岬公園）

1 ケネディ大統領が尊敬した上杉鷹山

コラム 3

鷹山を尊敬したケネディ大統領

ジョン・F・ケネディは、ニューフロンティア精神を掲げ、1960（昭和35）年に、43歳の若さで第35代アメリカ大統領に選ばれた人です。特に、ソ連との核戦争勃発の可能性があったキューバ危機に対応した指導者として有名ですが、残念ながら1962（昭和37）年暗殺により悲劇的な死を遂げました。

ケネディ大統領が就任時に、日本記者団から、「貴方が日本で最も尊敬する政治家は誰ですか」と問われて、「上杉鷹山」と答えたと言われています。上杉鷹山という人物は、内村鑑三著の「代表的な日本人」によって大統領が知ることになったとされています。

ケネディ大統領は、何よりも国民の幸福を考え、民主的に政治を行い、そして「政治家は潔癖でなければならない」といって、その日常生活を、文字通り一汁一菜、木綿の着物で通した鷹山の姿に、自分の理想とする政治家の姿を見たのかもしれません。



第35代アメリカ大統領
ジョン・F・ケネディ
(ウィキペディアより)

上杉鷹山書状 読下し
「成せばなる成さねばならぬ何事も
成らぬは人の成さぬ成けり」

米沢市上杉博物館所蔵

(1) キャロライン・ケネディ、父の思いを伝える

第35代アメリカ大統領ジョン・F・ケネディの長女で、駐日米国大使として就任したキャロライン・ケネディは、2013（平成25）年11月27日に東京都内で講演し、父親のケネディ元大統領が生前、上杉鷹山に心を寄せ、「善政と公益への献身を称賛していた」と述べました。

翌年の2014（平成26）年9月27日には来県され、米沢市で開催された「なせばなる秋まつり」で、伝国の杜2階バルコニーから、詰めかけた大勢の市民に上杉鷹山を尊敬した父の思いを語りました（下記）。

2015（平成27）年9月26日には、大使が来訪時にスピーチした要約文を記載した「キャロライン・ケネディ駐日米国大使の来訪記念碑」が建立されました。

キャロライン・ケネディ第29代駐日米国大使 米沢市訪問での挨拶の一部（H26.9.27）

「予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と俳人松尾芭蕉はこの地域に関する著名な作品の冒頭で記しています。同じように私の漂流も本日ここに連れて来てくれたということで喜びにたえません。

御存知のとおりケネディ大統領は、本日お祭りで祝っている方に敬服しておりました。上杉鷹山は、領民に対する献身、そして教育へのコミットメント、人を鼓舞した公共サービス、そして一人ひとりに世の中を良くする力があるとの信念を通し、何世代にもわたる人々を触発してきたリーダーであります。

皆様が鷹山から受け継いだ遺産を讃え、そして新しい世代にその教えを伝えておられることをお祝い申し上げます。父は「一人でも世の中に変化をもたらす、違いをもたらすことができる。皆やってみるべきだ。」とよく言っておりました。しかし、上杉鷹山ほど端的にそれを言い表した人はいないと思います。

「成せば成る」（大使が直接、日本語で）ありがとうございます。



キャロライン・ケネディ駐日米国大使のメッセージが刻まれた記念碑

(2) 内村鑑三が著書「代表的な日本人」で英語で外国に紹介した上杉鷹山

内村鑑三（1861～1930）は、「代表的な日本人」として西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の5人をあげ、その生涯を叙述しました。日清戦争の始まった1894（明治27）年に書かれた本書は岡倉天心『茶の本』、新渡戸稲造『武士道』と共に、日本人が英語で日本の文化・思想を西欧社会に紹介した代表的な著作です。

次の文は、内村鑑三が上杉鷹山について叙述した一部の抜粋ですが、鷹山が残した名言「成せばなる 成さねばならぬ何事も 成らぬは人の成さぬ成けり」に通じるものと読み取ることができます。

藩主の地位に就いてから二年後、鷹山は、はじめて自領の米沢に足を踏み入れました。それは晩秋のことで、ただでさえ悲哀のたちこめる状態であるところへ、「自然」が、さらにも悲しさを添えていました。

行列が、荒れ果てた、だれも顧みるものもないさびれた村を、一つまた一つ通るたびに、目の前に展開する光景を見て、多感な年若き藩主の心は深い衝撃を受けました。乗り物のなかで、鷹山が、自分の前にある火鉢の炭を一生懸命に吹いている姿を供の家来が見かけたのは、そのときでありました。家来の一人が、

「よい火をお持ちしましょう」と申しました。

「今はよい。すばらしい教訓を学んでいるところだ。それは後で言おう」

鷹山は答えました。その晩、行列が泊まった宿で、藩主は供の家来を集めて、その午後に学んだ新しい、貴重な教訓を説明しました。

「この目で、わが民の悲惨を目撃して絶望におそわれていたとき、目の前の小さな炭火が、今にも消えようとしているのに気づいた。大事にしてそれを取り上げ、そっと辛抱強く息を吹きかけると、実に嬉しいことには、よみがえらすことに成功した。“同じ方法で、わが治める土地と民とをよみがえらせるのは不可能だろうか” そう思うと希望が湧き上がってきたのである。」

—内村鑑三著「代表的な日本人（1908）」の和訳（岩波文庫）より一部抜粋—

(3) 現代も学べる経営学「上杉鷹山の三大改革」

鷹山は、当時窮地に追い込まれていた米沢藩を救うため、財政の再建、産業の開発、精神の改革の3つの大きな改革を進めました。

① 財政の再建

鷹山は、自らが節約した生活を行い、透明性の高い財政運営に努めました。

日常の食事は一汁一菜、衣服は上等な絹ではなく綿で作られたもので、奥女中は50人から9人に減らしました。役人たちにも質素儉約の協力と理解を求めました。また、財政難を克服するため、1年間の米沢藩の収入、支出、借金などを詳しく記載した帳簿を作成するとともに、より多くの人々の意見を聞くことを大事にしました。

② 産業の開発

鷹山は、養蚕や青芋、漆、織物などさまざまな物品を米沢藩の特産品にしました。また、農民だけでなく藩士に対しても田畑の開墾や治水のための土手修理を実施させています。更には、飢饉に対して人々を救うため、野草などを食料にする知恵をまとめた「飯糧集」を米沢藩が作成しました。

③ 精神の改革

鷹山は、「民の父母」となることを自分に言い聞かせ、藩政改革のために、例え重臣であっても処罰する、という厳しい態度で自分を律し、藩政に取り組みました。

鷹山は、「民の父母」としての根本的な方針を、自ら助ける「自助」、近隣社会が互いに助け合う「互助」、藩政府が手を貸す「扶助」の「三助」としています。

コラム 4 細井平洲と上杉鷹山

米沢市関根の普門院に細井平洲先生上杉鷹山公敬師の像が建てられています。この敬師の像は、1796（寛政8）年、上杉鷹山46歳、細井平洲69歳の時、平洲が3度目の米沢訪問をした時の、感動の対面の様子を再現した銅像です。鷹山が、14歳の時から教えを受け、終生師事した平洲への尊敬の思いをこめた出迎えでした。

平洲のふるさと東海市では、「米沢を見ずして平洲を語るなかれ」と言われ、米沢市と交流してきましたが、この度、東海市の市制45周年を記念して、2人の感激の出会いの場面を制作した像を、東海市平洲会が寄贈したものです。



上杉鷹山が細井平洲と再会した時の様子を再現した銅像（米沢市 普門院）



“Do it and it will be done: if you do not, nothing will be done; if something is not done, that is because you did not do it.”

These are the famous words of Uesugi Yozaan, lord of Yonezawa *Han* (the Yonezawa Domain) during the Edo period. Uesugi Yozaan rebuilt the economy of the Yonezawa *Han*, and developed many industries. He also promoted important changes to the people's way of thinking that would become the basis of their lives.

The 35th president of the United States, John F. Kennedy, respected Uesugi Yozaan as a great politician. His daughter, U. S. ambassador to Japan Caroline Kennedy, spoke about this to the people of Yamagata when she visited Yonezawa City in 2014.



ライシャワー博士の寄稿文碑（山寺芭蕉記念館）と山寺全景

Yamagata- The Other Side of the Mountain

It is a beautiful land, reminiscent of Japan as it used to be. So it seemed to Basho when he made his famous trip to Yamagata and the northland three hundred years ago, and this is the way I felt when I visited Yamagata a little over twenty years ago. It is not only the land of the past but also, I hope, the Japan of the future, where there is room for growth but growth which does not mar the happy balance between man and nature.

ライシャワー博士の寄稿文碑に刻まれた『山形－山の向こうのもう一つの日本』の英文

2 山形－山の向こうのもう一つの日本

コラム ⑤

ポスト山形DCポスター



このポスターは、2015(平成27)年6月13日から9月12日まで実施した「山形日和」観光キャンペーン(ポストDC)を広く情報発信するために使用されました。

(1) 「碑文」 “山形－山の向こうのもう一つの日本” ～ライシャワー博士が書き綴った山形の自然・人～

「山形－山の向こうのもう一つの日本」は、元駐日米国大使エドウィン・O・ライシャワー博士の言葉です。博士は、松尾芭蕉や、円仁えんにんと山寺、山形の文化や自然、人の魅力を紹介し、山形は、「もう一つの日本」と言っています。それは、自然の中に点在する小都市に快適な生活空間があり、日本の本来の姿を思い出させる美しいところであると記しております。

“私は強く言いたいのです。山形を良い例として「もう一つの日本」を見落としてはならないと。将来において自然と人間が健全なバランスをとっている、そのような「もう一つの日本」に日本全体がなることを望みます。”

山形は将来の日本のあるべき姿だという、博士のメッセージは、山形にとってかけがえのないものと言えます。

エドウィン・O・ライシャワー博士は東京に生まれました。ハーバード大学教授で、慈覚大師円仁じかくだいし えんにん(山寺立石寺の開祖)の研究で、博士号を取得、ケネディ大統領の要請を受け、日本人の妻、ハル夫人(松方正義元首相の孫)と共に、親日家の駐日米国大使として活躍しました。

ライシャワー博士が書き綴った『山形－山の向こうのもう一つの日本』は、1988(昭和63)年、山形市の市民グループ「風」(代表:田中裕子氏)の依頼により、英文による山形紹介本『YAMAGATA－The Other Side of the Mountain』に寄稿されたものです。



山形—山の向こうのもう一つの日本

日本はある意味で2つの違った国で成り立っています。一つは、巨大な工場や切れ目なく続く都市、そして東京一帯から北九州まで延々と続く高速道路から成り立っています。この意味での日本は、近年他の国々に知られるようになりましたが、たいてい魅力的ではありません。生活環境が制約されていて快適ではありません。自然自体も、人間の圧力によって無慈悲にも脅かされてきています。

ところが、このおびただしい主要地域とは遠くない所に、もう一つの日本が存在するのです。そこには、果てしなく続く山脈や大森林が広がり、そしてあちこちに点在する村や町や小都市の住民にとって、とても快適な生活空間があります。日本の本来の姿を思い出させる美しいところです。

それは、松尾芭蕉が300年前にかの有名な旅行で山形を訪れた時に目に映ったものであり、私自身が20年以上も前に山形に旅した時に感じたものです。山形が過去の日本であるばかりでなく将来の日本であると共に発展の余地があり、しかもその発展には自然と人間の喜ばしい均衡を決して損なうことのないものであって欲しいと私は望んでいます。

山形の位置する日本海側の気候は、暖かい時期には太平洋側とほとんど変わりません。しかし、冬においては著しい差があります。シベリアからの季節風は日本海側を横切るときに湿気を吸収し、山脈の西側に多く雪を降らせます。そこがかの有名な『雪国』です。冬期間常に5～6フィート（150～180cm）の雪が積もっています。

私はこの「もう一つの日本」に属する山形を訪ねるにあたり、あえて晩冬を選びました。トンネルを抜ける短い線路は、私を太平洋の乾いた地面や太陽のまぶしい空から、雪に埋もれた冬の不思議な国山形に連れていってくれました。

私には、ほんの一瞬のうちに世界の半分を旅したかのように感じられました。山形の人は雪のことを言い訳し、当惑しているように思われました。しかし、私にはすばらしいことに思われました。雪は山々や広大な山形の自然の美しさに、さらに素敵な魅力を与えてくれているのですから。私の山形への関心は、言うまでもなく、自然の美しさに留まりません。

私の学者としての経歴のはじめに、円仁（慈覚大師）の日記の翻訳や研究に多くの年数を費やしました。円仁は日本の僧侶で、9世紀に10年にわたる中国留学の間、日記を書き続けたのです。後に円仁は山形に寺を築き、その遺品は山形の歴史的財産になっているのです。もちろん、それらは私にとって興味深いものです。

山形の人々もまた魅力的です。外国人があまり訪れないので人々は外国人の訪問客には新鮮な気持ちで親切にしてくれます。

私は友人から日本でどこを見るべきかと尋ねられると、きまって踏みならされた道から一步はずれてみるように勧めます。もちろん、東京や大阪などの大都市は日本の縮図であるから見るべきであるし、日本の歴史を残す京都や奈良のようなところも見逃せません。しかし、私は強く言いたいです。山形を良い例として「もう一つの日本」を見落としてはならないと。将来において自然と人間が健全なバランスをとっている、そのような「もう一つの日本」に日本全体がなることを望みます。

1988.3.1 エドウィン・O・ライシャワー（日本語訳：ハル・M・ライシャワー）



ライシャワー博士御夫妻立石寺来訪

(2) ライシャワー博士が研究した慈覚大師円仁と山寺

ライシャワー博士は東京帝国大学（現東京大学）での研究活動の博士論文に「円仁」を選んでいました。慈覚大師円仁は838～847年まで、日本から中国に留学しており、その時書いた日記をライシャワーは英訳しています。

山寺は、860年に慈覚大師円仁によって開山されており、そして、その山寺には慈覚大師円仁の霊も祀られています。その山寺が一望できる芭蕉記念館敷地内に「山形—山の向こうのもう一つの日本」の碑文が建立されています。



慈覚大師円仁が開山した山寺全景



Currently, Yamagata Prefecture is telling others about the good points of Yamagata with the catchphrase “Another Japan.”

“Yamagata—the other side of the mountain” are the words of Edwin O. Reischauer, former U.S. ambassador to Japan. He highly appreciated Yamagata as a place which “still maintains a healthy balance between man and nature,” and people in Yamagata are proud of this.

Reischauer is also known all over the world as a researcher about Ennin, or Jikaku Daishi, who founded Yamadera Risshaku-ji Temple. Ennin is enshrined at Yamadera, and the words “Yamagata—the other side of the mountain” are engraved on the stone monument which stands in the Yamadera Basho Museum grounds. From there, you can see the whole view of Yamadera.



イザベラ・バード (Isabella Lucy Bird, 1831年~1904年) は、イギリスの女性旅行家、紀行作家。明治時代の東北地方や北海道、関西などを旅行し、その旅行記 "Unbeaten Tracks in Japan" (日本語題『日本奥地紀行』『バード 日本紀行』) を書いた。(ウィキペディアより)



川西町下小松古墳群からの米沢盆地 (川西町) 眺望風景



現在の南陽市鳥上坂と白竜湖風景とバードが歩いた鳥上坂 (高橋由一石版画) 山形県立図書館所蔵

3 イザベラ・バードが見た山形

(1) アジアのアルカディアと^たたえられた米沢盆地

イザベラ・バードの山形県における最初の旅は、置賜地方の「十三峠」越えの旅でした。その旅のほぼ半分が土砂降りの中の移動で、苦難をくぐり抜けてようやく辿り着いたのが、米沢盆地でした。「十三峠」最後の諏訪峠を下ったバードは、川西町小松の町を含む米沢盆地を気に入り、次のように表現しました。

コラム 6

イザベラ・バードが歩いた山形路

北日本旅行のバードが山形県への最初の一歩を踏み出したのは、「十三峠」への道でした。新潟県から玉川 (小国町)、手ノ子 (飯豊町) を経て小松 (川西町) に進みました。吉田、洲島、赤湯を通り、白竜湖を見ながら鳥上坂 (南陽市) を歩き、米沢盆地を満喫しました。

その後、上山を通り、近代化が進められた山形に入りました。山形の街を堪能した後は、天童、東根、村山、尾花沢、新庄に入り、山形の旅の最後は金山町となり、秋田へと向かいました。



米沢の平野は、南に繁栄する米沢の町があり、北には^{とうじ}湯治客の多い温泉場の赤湯があり、まったくエデンの園である。〈鋤で耕したというより、鉛筆で描いたように〉美しい。米、綿、^{あひ}とうもろこし、^{たばこ}煙草、^{あい}麻、^{なす}藍、大豆、茄子、くるみ、水瓜、きゅうり、柿、杏、ざくろを豊富に栽培している。実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディア (桃源郷の意) である。自力で栄えるこの^{ほうやく}豊沃な大地は、すべて、それを耕作している人びとの所有するところのものである。(中略) 美しさ、勤勉、安楽さに満ちた^{かんがい}魅惑的な地域である。山に囲まれ、明るく輝く松川 (最上川) に灌漑されている。どこを見渡しても豊かで美しい農村である。

「アルカディア」というのは、ギリシャに実在する地域名で、ギリシャ神話世界の神々の故郷の一つとされ、古くから、憧れを込めた「牧歌的理想郷」の代名詞として使われました。アジアのアルカディアは米沢盆地を指した表現で、米沢盆地の北端に位置する「ハイジアパーク南陽」には、バードの記念コーナーが併設されています。



ハイジアパーク南陽の「イザベラ・バード記念コーナー」

(2) 美しい風景のある温泉場上山市

当初、赤湯温泉に宿泊するつもりだったイザベラは、余りに多くの宿泊客でにぎやかすぎたため、急ぎよ歩を進め上山温泉に泊まっています。バードは上山の町の印象を次のように記しています。

上山の町は、楽しい家々に庭園があり、美しい風景のある温泉場で、旅館のもてなしに感動し、清潔で日本で最も空気がからりとしており、町が心地よく横たわっているところである。

(3) ほれほれとして見たくなる地方天童市

初代県令三島通庸^{みしまみちつね}による近代化政策が進められ、文明開化最先端の町、県都山形に滞在した後、天童に向かいました。

当初は、天童に宿泊予定でしたが、天童の宿屋が「お蚕様^{かいさま}」で満員（当時は旅人よりも蚕が大事にされていた）で、楯岡に向かうことにしましたが、天童の町については次のように記しています。

山形の北に来ると、平野は広くなり一方には雪を戴いた^{いた}すばらしい連峰が南北に走り、一方には側面とところどころ突き出た断続的な山脈があり、この楽しく愉快的な地域を取り囲んでいる。ほれほれとして見たくなる地方で、多くの楽しい村落が山の低い裾野に散在している。温度はただの70度（摂氏21度）で北風であったから、旅をするのは特に愉快であった。

(4) ロマンチックな雰囲気のある金山町

新庄市から国道13号線を北上し、上台峠を越えると突然目の前が開け、金山の幻想的な風景に思わず感嘆の声がもれます。バードも同じ感動を覚えたのでしょうか、金山入りした時のことを次のように記しています。



イザベラ・バードが目にしたと思われる金山町の風景

今朝、新庄を出てから、険しい尾根を越えて、非常に美しい風変わりな盆地に入った。

ピラミッド形の丘陵が半円を描いており、その山頂までピラミッド形の杉の林^{おお}で覆われ、北方へ向う通行をすべて阻止しているように見えるので、ますます奇異の感を与えた。

その麓に金山の町がある。ロマンチックな雰囲気のある場所である。

私は正午にはもう着いたのであるが、一日か二日ここに滞在しようと思う。駅^{えき}通にある私の部屋は楽しく心地よいし、駅通係はとても親切であるし、しかも非常に旅行困難な地域が前途に横たわっているからである。

県内にある イザベラ・バード記念碑



川西町埋蔵文化財資料展示館郷土館 1985(昭和60)年



上山市月岡公園 2004(平成16)年



天童市舞鶴公園 2003(平成15)年



金山町金山小学校正門 1977(昭和52)年



Isabella Bird was an English traveler from the UK. During the Meiji period she traveled through Tohoku, Hokkaido and Kansai, and wrote a book about this journey. According to the book, she came from Niigata to Kawanishi Town by crossing the Jusan-Toge pass. Passing through Nanyo City, she visited cities, towns and villages located along the Route 13. She ended her trip to Yamagata by visiting Kaneyama Town.

Bird wrote about the natural beauty of Yamagata, the scenery of the towns and villages, and people's wonderful way of living there. She was impressed to see the Yonezawa Basin, and called it "an Asiatic Arcadia." She described Kaminoyama as "a clean, dry place," Tendo as "as cheerful and pleasant a region as one would wish to see," and as for Kaneyama, she said it "lies in a romantic situation." In each city, town, and village she visited, monuments were built in memory of Isabella Bird's visit and her admiration for them.